

○夏期高温な気象条件に適応した新品種の育成と連作障害対策が課題。平成12年に「早生1号」、平成23年に「早生2号」と「中生」を育成し、苗供給体制も整備。平成29年からはピンク花色のメリクロン苗の供給を開始。**新品種「おかやまオリジナルリンドウ」の普及拡大**を目指す。

○普及指導センターが中心となり、研究所や行政等と連携して実証ほ設置による**新品種栽培技術や連作障害対策技術の確立**と**栽培面積の拡大**を図る。  
○りンドウの販売金額目標を**1億円(H30)**とする。

### 具体的な成果

#### 1. 新品種栽培技術の確立と普及

- 実証ほを活用した現地検討会を開催
- 栽培啓発資料を作成
- 「新技術セミナー」開催による技術普及（新品種面積 H25 1.5ha→H29 2.4ha）
- メリクロン苗（おかやま夢りんどうピンク中生1号）の栽培実証（H29～）

#### 2. 連作障害対策技術の確立

- 樹皮を活用した栽培の普及。（コンテナ栽培面積H29 96a）



樹皮培地で栽培しているおかやま夢りんどうピンク中生1号の2年生株

#### 3. 販促活動の強化

- 生産者、関係団体が主体の販促活動
- 市場からは需要期向け品種として評価（生産額 H28: 74百万円）

### 目標を達成するための普及活動

平成26年度

- 普及指導センター、革新支援センター、研究所等で「おかやまオリジナルリンドウ技術支援チーム」設立
- 新品種栽培技術の検討および栽培啓発資料作成

平成26～29年度

- 新品種の安定生産技術の確立と普及実証ほや展示ほの設置  
現地検討会・研究会の開催
- コンテナ栽培技術など連作障害対策技術の確立と普及  
実証ほの設置  
地域版技術マニュアルの作成

平成26～30年度

- 新品種を「おかやま夢りんどう」として販促活動支援

生産者と流通業者の意見交換会

平成29年度～30年度

- ピンク中生1号のメリクロン苗実用化実証ほの設置

### 関係機関との連携

- ・革新支援専門員は、実証ほの設置場所や内容等が、設置効果を十分に発揮できるように普及指導員を指導・助言。
- ・研究機関や行政、関係団体等の連携・調整は革新支援専門員が実施。

### 今回の普及活動の特徴

革新支援専門員の立場で、地域の広域的な課題を設定し、各普及指導センターの取組の進捗管理を実施。

## おかやまオリジナルリンドウの普及

活動期間：平成24年度～継続中

### 1. 取組の背景

岡山県のりんどうは、県北部を中心に昭和40年代から生産が行われており、西日本では最大規模の産地であるが、夏期高温な気象条件に適応した品種が少ないことや連作障害対策が課題となっていた。

平成23年には農業研究所が「早生2号」と「中生」の2品種を実用化した。「早生2号」は8月、「中生」は9月の需要期向けの品種で、年による開花期の変動が小さく、りんどうとしてはやや気温が高い岡山県に適する。

また、市販のピンク花色品種が少なく、入手も難しいことから、平成29年からメリクロン苗による「ピンク中生1号」の実証栽培を始めた。

りんどうは連作を嫌う品目のため、同じほ場で連作する、生産性の低下や欠株の増加等の連作障害が問題となる。そこで、同じほ場で栽培を継続する方法として、桧や杉の粉碎樹皮を培地とする「コンテナ栽培」の実用化を図った。

### 2. 活動内容（詳細）

平成26年度には普及指導センター、革新支援センター、農業研究所等で「おかやまオリジナルリンドウ技術支援チーム」を設立し、県内のりんどう生産者で構成する「りんどう研究会」等を対象に、オリジナルリンドウの安定生産技術の現地講習を行うとともに、生産者間の情報交換の場を設けた。

栽培啓発資料としてオリジナルリンドウの特性や、同品種を導入した生産者の評価を記載した「おかやま夢りんどう早生2号—作ってみませんか」を作成・配布した。

りんどうの安定生産を図るため、高畝とすることや粉碎樹皮を土壌混和する実証ほを設置し、効果を確認した。

コンテナ栽培についても実証を行い、慣行栽培とほぼ同等の切り花が得られることを示した。自動かん水設備が必要なことなど、慣行栽培に比べて経費を要するが、生産者の高い関心を集めた。ただし、本技術は粉碎樹皮という特殊な培地で栽培するため、慣行栽培より細やかな管理が必要である。

平成29年から「ピンク中生1号」の現地実証を始めた。従来品種に比べて欠株の発生が多いなどの課題があるが、生産者の期待は大きい。30年度には経済性の評価を行う予定である。

りんどう生産者は市場関係者や花き商人と年数回意見交換を実施し消費者ニーズ等の把握を図った。市場関係者からは需要期に出荷できる品種として評価されている。

### 3. 具体的な成果（詳細）

#### (1) 新品種の普及

新品種の栽培面積は平成25年の1.5haから、平成29年には2.4haに拡大

した。特に、「早生2号」は強健で8月の需要期に出荷できる品種ということが生産者に評価され、この時期の主力品種として定着している。

#### (2) コンテナ栽培

連作障害対策として取り組んだコンテナ栽培は、平成29年度には96aまで拡大した。

### 4. 農家等からの評価・コメント

T氏：「早生2号」は下枝がたくさん出るが、3年生以降はそれほど気にならない。強健で、切り花本数も多く生産性は高い。

M氏：「早生2号」は十分草丈を確保できるので、株養成に気を配る必要がない。栽培しやすく、需要期に出荷できるのも良い。

H氏：「早生2号」は需要期に出荷できる。株が強いので初心者にはこの品種を勧めている。

### 5. 普及指導員のコメント（普及推進課 副参事 粒生直義）

「早生2号」は草勢が強いため欠株が少なく、生産性が高い。需要期の出荷率が高いのも利点である。花段数が多いが、需要期向け品種はあまり花段数の多さが評価されず、頂花の開花がやや遅れる点が惜しまれる。栽培技術で解決できないか検討が必要である。

### 6. 現状・今後の展開等

農業研究所が極早生品種等新品種育成に取り組んでいる。

「ピンク中生1号」は研究所以外で栽培経験がなかったことから、普及性を確認するため、平成29年、30年に現地栽培実証を行っている。